

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷六第

行發日一月六年七正大

論 說

生命保險業者ノ保健運動……………法學博士 財部 靜治

植民地統治ノ形式ニ就キテ……………山本美越乃

分業ヲ論シテ福田博士ノ教ヲ請フ……………文學士 高田 保馬

所得稅ニ於テ所得ノ統一課稅ニ定……………法學博士 神戸 正雄

職工組合論……………法學士 河田 嗣郎

露國ノ新まりるくす主義……………朱田庄太郎

諾威ノ海運……………法學士 小島昌太郎

時事問題

米價ノ調節……………法學博士 戸田 海市

雜 錄

元祿年間貨幣改鑄ノ由來……………藤田 元春

戰費トハ何ゾヤ……………文學士 小島昌太郎

赤穂ノ鹽田……………文學士 本庄榮治郎

雜 錄

元祿年間貨幣改鑄ノ由來

藤田元春

其ノ一

三代將軍家光ノ頃迄ハ、尙徳川創業ノ時期ニシテ、財政豊富ナリシハ言フヲマタズ、次ニ家綱ノ代ニ至リテ、明暦三年江戸ニ大火アリ、全府灰燼ニ歸セシ程、開府以來未曾有ノ大災ナリシカバ、其町人ノミニ賑貸セシ額モ、十六萬兩ニ上リ、本丸ニ丸其他ノ土木費、且ツハ禁裏兩度ノ造營等ニ費ス所巨萬ニ及ビ延寶中ニハ開府以來ノ大凶年ニ會ヒテ、一斗ノ米代銀百四十匁ニ騰貴セリ、コノ頃ヨリ府庫ヤヤ窮乏ヲツグルニイタリシガ、上下ノ風俗益々奢侈ニ趣クト共ニ法禁モ漸次弛ミ來リ、昔ノ三河武士ノ風稍ク薄ラギユキヌ(皇典講究所講演第十二册内藤耻斐氏、徳川氏通貨之事參照)、加之、酒井忠清寛文四年三月、大老トナリテヨリ、大名旗本ノ

奢侈愈甚シクナリ嫁娶吉凶ノ事、莫大ノ費用ヲ用フニ至リシカバ、世ノ中、ヲシナベテ財用ニ苦ムノ端ヲ開ケリ、隨筆集所載、江都聞見錄ニ(江都聞見錄ハ撰人不詳ナレドモ、按ルニ撰者嚴有常嚴二公ノ時ニ在リテ親シク聞見セシ所ヲ記セシモノニシテ文二一ノ虛設ナキノミナラズ其事往々他書ノ傳ヘザルヲ傳フ、珍重スルニ足レリ)

『前橋少將酒井雅樂頭、天下ノ權ヲ握リ、政事巨細トナク皆其手ヨリ出テ、車馬門ニ滿チ公卿大夫、伏謁シテ仰見ルモノナシ名ケテ下馬將軍トイヒ、又高砂將軍トイヘリ中略、サレバ雅樂頭ヲ襲隨ストイヘバ行幸ノ枚ヨリ、去ビタケシク新ニ殿ヲ造リ接伴ノ人ニ厚ク物ヲホカリ、取ナシヨキ續ニト思ヒ、四海ノ珍ヲ集メ、庖丁人鹽梅人ナド皆其人ノ從者ヲ招キ、美盡シ、中略、我がチニ結構シケル程ニ一日ノ費萬金ニアマリタリ』

以テ其驕奢ノ狀ヲ見ルニ足ルベク且ツハ上流社會ノ生活狀態ヲ揣摩セシムルニ足レリ然ルニ吹塵錄(第三十册)ニヨレバ寛文八戊申年三月ノ觸書アリ、衣食住一般ニ亘リテ儉約ヲ令シタルモノナレバ、以テ當時ノ一般社會ノ傾向ヲ窺フベキ材料トナスベクコレヲ創業時代ノ質素ニ對比シテ轉タ世運ノ推移ノ著シキモノアルヲ感ゼシムルニ餘リアリ曰ク

「一、町人屋作致輕少、ナゲシ杉戸付書院、櫛形彫物、組物、床フチ、サンカマチ塗候事并、唐紙、張付、停止事

付遊山船、金銀之紋、座敷之内、繪書申間敷事

一、嫁娶ノ刻、萬事、成程、輕可仕事

付、刀、脇差、出候儀無用之事

一、町人衣類上下、隨其分限、儉約ヲ相守可着之、毛織ノ羽

織、カッパ無用之事 付、召仕之者其外、輕職人、猶以麁

相成衣類可着之事

一、町人振舞成程輕クスマシ、縦雖爲有徳ニ汗五菜不可過之

但家督又ハ嫁娶ノ時ハ名主ニ伺可受差圖事

一、金銀之唐紙、ハマ弓、羽子板、雛ノ道具、五月之甲、金

銀之押箱、一圓ニ無用之事

一、祭禮之渡物不可結構カログ可仕事

一、葬禮、佛寺有徳之齋タリトイフ共目ニ不立様ニ成程輕可

仕事 右之通江戸町中へ、從町奉行、相觸候間可被得其意候、以上」

即チコレヲ寛文三年九月ノ「國持大名タリトモ

臨時ノ饗應ハ二汁七菜タルベシ、小祿ノ輩ハ、

タトヘ兼テ沙汰シタル饗應ナルモコノ敷ヲ用フ

ベシ」(吹塵錄第三十册)トアリシニ比スレバ町人ガ

比較的富有トナリテ其生活將ニ侯伯ヲ凌ガント

スルモノアルヲ見ルベク、海外輸入ノ毛織ヲ着

シ金銀珊瑚ヲ以テ綺羅ヲ飾ルモノ將ニ多カラン

トスルノ徴候ヲ示メセリ、コハ單ニ江戸ノミニ非ズ、京、大阪諸國ノ町人モ同様ナリシナルベシ、江都聞見錄ノ著書ハ忠清奢侈ノ條下ニ

「サレドモ諸國ノ人々皆豐饒ニシテ上下共ニ色メキテ太平ヲ

樂メリ」

ト評シヌ、サレバ四代ノ頃ハ江戸モ地方モ餘裕

アリシ事トテ其ノ弊未ダ甚シキニ至ラザリシモ

コノ著書ガコノ事ヲ書キツケシ折(元祿時代)ニ

ハ、「是モ亦一昔ナリケリ、」ト慨セシ程ニ、世ハ

奢侈ノ弊ニ堪ヘザラントセリ、又曰ク

「諸商人ノ奢侈、肥馬輕裘、從者モ多ク、土ニ異ナルハ鑣ヲ持タ

セザルノミナリ、後ニ劔ナキトテ世ニ「アマ龍祖」トゾ申ケル、

今ノ大君(綱吉)ニ至リテ町人ノ刀ヲサシ從者ニ刀差、ソレ

候事、カタク御制アリテ、馬ニノレルニ番持、袂箱持、馬取

マテニシテ士トハ異ルナリ是ニ付キテ著モ昔トカハリケリ」

ト

依之テコレヲミレバ五代將軍綱吉ノ世ニ入りテ

ハ天下益々太平ニシテ著モ昔トカハリテ、如上

ノ傾向ニ更ニ一步ヲ進メ所謂元祿驕侈ノ時代ヲ

現出スルニ至リシナリ江都聞見錄ハ更ニ之ヲ細

叙シテ曰ヘリ

『二十萬石以上ノ城主、諸士ノ饗應アレバ一人ニ金一枚ホドノ
費アリ、總一日ノ費、數百金ニ餘レリ、二三萬石ノ城主ニモ
萬石ニ餘リタル客、一人ノ費、八十金ニテ足ラザルトゾ、吾知
ルコトアリテ如此サヘ華覿ト見ユルニ、後ノ世又珠璣金塊ト
ナス人アリテ此理ヲ笑ハンモ知リガタク、何ノ世カ石崇ナカ
ラン、我國人京ニテ那波屋トイヘル町人ヲ饗應シケル一日ノ
費百銀二萬兩ナリ、此事ニテ町人欲食ノ奢侈知ルベシト

サレバ元祿元年ノ御觸書ニモ

『酒ニ酔ヒ、心ナラズ、不届チ爲スモノ往々ニ有之、既ニ大酒
ノ禁制アレバ、彌以テ酒ヲ飲ム事チ人々慎ムベ、客人有之候
トモ酒ヲ強ル事無用タルベシ』ノ令アリ

吹塵錄ニモ左ノ令アリ

元祿元戊辰年十二月

『一、頃日町中ニテ、女ノ衣類結構成物着シ候由、相聞候、彌
先年被仰出候御定ノ外、結構成衣類着シ申問敷候、自然相背
御定ノ外、結構成衣類着シ候ハ、男女共ニ召捕之、急度可申
付候間此旨可相守候以上』

一般世上ノ有様如斯クナレバ將軍綱吉屢々勤儉
ヲ令シタレドモ自己ノ行爲ハ之ニ反スルモノ多
カリキ

三王外記ニ曰ク

『綱吉公、喜、華奢、好施與、日賜澤下不貸、久之内庫且匱之、

雜錄 元祿年間貨幣改鑄ノ由來

有司憂之、老中或諫之、公曰、予承レ統、他無所樂、唯賜臣、
是吾樂也、卿等無復言之』ト

江都聞見錄ニハ

『元祿甲戌ノ春(同七年)國主ノ尊キ鬼神ノ如ク平日ノ奉養豐
盛ニ、從者ノ便儀、邸宅ノ高明、車服ノ鮮麗、モ云ニ暇アラ
ズ、太平ノ久シク、人々皆安居シテ國モ豊ニ、戶口昔ニ十倍
セリ、人々皆我主ヲ尊ベバ誠ニ鬼神ニ同ジクテ、天帝ニ見ユ
ルニ異ナラズ、頼朝尊氏ノ總管タリシモ、今日ノ見ル所ニク
ラブレバ、今此御代ノ大國ノ主ニ及バザルコト多カリキ、今
年老中へ御成、先ヅ大久保甲賀守次ニ阿部豊後守、戶田山城
守、土屋相模守次第二御成アリテ四月十日ニ終ル。

各藩邸、益地チ以テ新ニ御殿チ作り別ニ門ナ開ク、路ノ塵チ
拾フニ隊ノ長ナ立、掃除スレバ、總テノ事押テ知ルベシ、扱
御料理御膳道具御手箱マデモ御城ヨリ持運ビ、薪炭モ持來リ
テ、主ヨリ鼎チワタシテ退クバカリナリ、尤モ從者ノ馳走、
五六百人ニ餘レリ、此費一日三千金ニ過ヌベシ、一度ノ御成
萬金ニ及テモ猶立ラズトゾ』

綱吉繼嗣以來、寺院ノ新建アリ、三ノ丸ニ、桂
昌院、五ノ丸、北ノ丸等ニ、侍妾ノ住居ヲ造營
スルアリ、加フルニ、天和三年正月、江戸大雨
大洪水ノ災アリ、四月ニハ日光山、大地震アリ
元祿六年ニハ、畿内ノ大洪水アリ、天災ノタメ
ニ、幕府ノ歳入ハ、著シク減少セルニ、歳出ハ

第六卷 (第六號 一三五) 八八五

年ヲ追フテ増加スルアリ、加フルニコノ華奢濫
與殆ンド度ナキヲ以テス、サレバ、累世ノ貯蓄
殆ンドツキテ(吹塵錄第九册參照)既ニ日々ノ用途サ
へ、支辨シガタキ程ニ達スルニ至レリ。三王外
記ニ曰ク

『故事王即位、必謁日光山陵、靈王(當靈院殿)立敷敷、及元
祿中、詔列相、議日光之行、先是王奢侈且好與府藏殆空、用
度不足、瀛華殿(別二掖皆有神祖所藏、金數鉅萬。後先輪諸內
府、王服用之。以濟其欲。於是王府遂空。

列相奏言、殿下日光之行、常用十萬金、而今府藏空竭、無以
供費、未可以有行也、王泣曰、吾有海內、而不得有數日之行
馬用玉爲。因減飲食弗樂、列相及侍中諸大臣皆病之、時忍侯
正武(阿部正武)爲計相、召大農度支長官以下、而問足用之術
焉。

大農萩原重秀對曰、海内見行世、幣既有其數、不可遽施、
莫如和劑他物以爲貨幣。無取益於原材而其數倍、故爲之便矣。
忍侯曰善遂奏請、造貨幣。報可。

カクテ財政ノ困難ハ、其ノ窮極スル所、一條ノ
血路ヲ、貨幣改鑄ノ方案ニ見出スコトナリテ
遂ニ元祿八年八月ニハ、慶長以來ノ良貨ヲ改鑄
シテ、惡貨トナシ、原料ヲ益スコトナクシテ、
其數倍ノ通貨ヲ得ルニ至レリ。

然ルニ此書ニモ見ユルガ如ク、コノ改鑄ノ策ハ、
專ラ萩原重秀ノ獻策ナリト、世ニ云ヒ傳フレド
モ、實ハ然ラズ、既ニ寛文年中ニヨリ、カカル
建議ヲナセルモノアリシナリ。

其ノ二

三貨圖彙卷十二ニ曰ク

『寛文年中ニ金座ノ者共打寄相談シケルハ、金子一兩ニ銀子何
程入レテ吹吹ムルトキハ。日本ノ金何程多ク成ノ道理ナリ。

但シ余ノ位少シ劣ル事ニ構ヒモナシ。世上重寶何増倍ノ御德
用ト、公儀ナカリテ己等ガ利欲ヲ構へ、當時ノ老中ノ内ニテ
土屋但馬守數直殿サへ、得心アラバ、願成就スベシト云合ヒ
テ、但馬守殿へ、入シテ申上ケル。公儀御德用ト、有之故ニ
右ノ書付ヲ留メ置レケル、去間、イツカ、イツカト、沙汰ヲ
待替シケルニ、一向其沙汰無リシカバ、失念ニヤト、但馬守
へ、申入タル人ヲ以テ、重テ、窺ヒ試ミケルニ、其時宣玉ケ
ルハ、町ノ者共、願立申筋、大ニ違ヒタリ、中略、近代ハ昔
ノ如キ、紫踏金少ク、總體黃金ノ色白ミタルサへ、上ニモ歎
キ思召、是ヲ又、次ノ位ニ吹替テ、日本金ノ位ヲ、引下グル
コトハ、下ノ了簡ノ及ブ所ニ非ズ、此書付ハ、返シ渡サレヨ
ト、有シトカヤ

其後金座ノ者共、願ノ叶ハザルヲ残念ニ思ヒ、延寶七年土屋
殿卒去後、元祿年ニ至リ、萩原近江守重秀殿、勘定奉行ニテ、
又御儉約申立ラレシ時、折ヲ得タリト、金座ノ者共、寛文年

ノ書付ナ潤色シ、近江殿へ、持カケ、内談シケレバ、案ノ如ク、老中職モ尤ニ思ハレ、御聞ニ達シ、程ナク元祿金銀吹替ノ事出来タリト。』

コレニヨリテ、之ヲ觀レバ、コノ改鑄ノ策ハ、既ニ約三十年間ノ懸案ニシテ『金座ノ者共、銀座ノ者共ト、相謀リ兼テ巧ミシ事』(三貨圖卷十八)ト見ルベシ。

サレバコノ改鑄ノ事ニ就テ、大日本貨幣史卷五ニモ、

『元祿金銀貨ノ事ハ、元祿ノ時、金改、後藤ノ家甚ダ衰微シ、其職チモ、ナシガタキ體ニイタリシヨリ、金銀貨ヲ改鑄シ其數額チ増サントノ一策チ生ジ、屢次、時ノ町奉行ニ其策チ建言シタリ、然ルニ元祿八年、町奉行ヨリ答ヘニ金銀貨チ改鑄スルハ、重大事件ナレバ、汝輩ノ意ニ從フ能ハズ、然リト雖モ、今回政府ニ於テ金銀貨チ需要スルコトアレバ、之チ改鑄スルナリ、云々然レバ、元祿金銀貨ノ改鑄ハ、萩原某ノ策ナリト、云ヒ傳フレドモ、或ハ是等ニ基シテ、策チ生ゼシナラシム計リガタシ。』

ト論ゼリ、凡ソ如斯キ重大事件ガ、一朝ニシテ萩原一人ノ考ニヨリテ、定マレリトスルガ如キハ、信ゼラレザル事ナレバ、金銀座ノ者共ガ、利欲ニマヨヒ、兼テ願ヒ出タリシ事ナリト見ル

ハ、蓋シ正嶋ヲ得タル觀察ナリトスベシ。サレバ、元祿金銀貨、改鑄ノ直接原因ハ、上ニ述ベタルガ如ク、幕府財政ノ困難窮乏、之ヲ然ラシメタルモノナルモ、一面ニ於テハ、銀座銀座ノ窮狀ガ、コノ改鑄ヲ促シタル一因トナリタリト見ル事ヲ得ベシ。

銀座銀座トハ、徳川時代ニ於ケル幕府直轄ノ金銀貨鑄造發行所ニシテ初メ金銀改役ノ支配ニアリ、後勘定奉行ノ管轄スル所トナレルモノナルガ(吹塵錄第二十一册)其ノ經營ハ主トシテ吹賃ニヨリテ支辨サルル所ノ者ナリ、

經濟大辭書ニ、柴謙太郎氏ガ、銀座及銀座ニ就テ、説明スル所ヲ見レバ、其座ノ取扱フ所ノ原料左ノ如シ、

- 一、銀座ニ於ケル原料ハ
 - 一、佐渡甲斐其他ヨリノ地金
 - 二、古金(引替所ヨリ來ル)
 - 三、兩替屋ヨリ瑕金、輕目金、
- 一、銀座ニ於ケル原料ハ
 - 一、佐渡但馬、石見ノ灰吹銀

二、引替銀

即チ其鑄造ノ主要材料ハ、實ニ當時ノ主要鑛山ノ產鑛、其他ノ出土原料ニシテ、元祿改鑄ノ令定マリテ後ニハ、第二項ノ古金又ハ引替銀ナルモノヲ收納シテ、其鑄貨ノ材料トナスニ至リシモ、元祿八年以前ニハ、其鑄貨ハ第一項ノ天產ヲ俟チテ之ヲ營ムニ止マリシ者トス。第三項ノ瑕金、輕日金ノ如キハ、之ヲ鑄直サバ、寧ロ、補足ノ原料ヲ要ズベキモノニシテ、此ノ頂ノ増加ハ、希フベキコトニ非ズ、又其額モ些少ニシテ、鑄造ノ大勢ニハ、關セザリシナルベシ。思フニ金銀座ガ、吹賃ノ所得ニノミヨリテ、其ノ業務ヲ經營セシモノトスル以上ハ、其鑄貨ノ原料ニシテ、常ニ豊富ナラバ、座ハ決シテ、衰微スベキ性質ノ者ニアラザルナリ。然ルニ上ニ見ユルガ如ク、當時金銀座ノ、衰微ヲ來シタルヲ事實ナリトセバ、座ノ役員ガ、荒怠懶惰業ヲ務メザリシニ非ザル限リハ、其事業ノ閑散ニシテ鑄貨ヲ爲スコト少カリシニヨルト、見ザルベカラズ。即金銀座ニ吹賃ヲ與ヘシムベキ鑄貨ノ原

料少カリシニヨルモノト認メザルヲ得ズ。實際ニ於テ、當時、我國ノ金銀鑄貨原料、即金銀ノ地金ハ、其產額甚ダシク、減退ノ狀況ニアリシナリ。コノ事ハ、諸書ニ散見スル所ナリト雖モ正確ニ其產額ノ消長ヲ、詳論センニハ、史料未ダ十分ナラザルノ憾アリ然レドモ、其產額ノ減少ガ、ヒイテ金座銀座ノ不振ヲ來シタルハ、疑フベクモアラズ。

要之スルニ、元祿年間貨幣改鑄ノ由來ヲ尋ヌレバ、其眞因ハ先ニモ述ベタルガ如ク、幕府財政ノ不如意ニシテ、マヅ、『御手薄ノ御勝手ニヨリ金銀分銅ノ消費』(吹摩錄第九册 享保年代ノ語)アリツイデ益其窮乏ヲ救ハンガ爲ニ、貨幣改鑄ノ窮策ニ出タルニ外ナラズト雖モ、而モ之ト相俟チテ、鑛產ノ減少ガ、金銀座ニ影響シ、其ノ事業ノ閑散ハ、彼等ノ窮迫トナリ、從ツテ金銀座ノ者共、自家ノ利害關係上、吹賃ノ收入ヲ増加センガ爲ニ、改鑄ノ舉ヲ建築シ、元祿ニ至リテ、遂ニ其目的ヲ達スルニ至リシ事情モ、又輕々看過スベキニ非ザルナリ。(完)